

# 新聞社説の中心文における 文末述部の形態的特徴 —尾括式文章の場合—

後藤 利枝

## 1. はじめに

文章構造を分析する際、中心文を核とする段(または文段、段落)を認定し、相互の統括関係により文章構造類型を決定していく方法が有効であるとされている<sup>(註1)</sup>。言い換えれば、中心文とは、文章の骨格を担い、文章を把握する手掛かりとなるべき文だと言える。現在に至るまで様々な文章研究がなされ、中心文の重要性についても述べられているが(次節参照)、中心文そのものの形態を分類し、数量的に示したものは見当たらない。そこで本稿では、中心文の文末述部の形態を分類し、その数量的傾向から中心文に形態的特質があるものなのか、また、文章構造類型の違いにより形態的特質が見られるのかについて考察していきたい。

## 2. 「中心文」についての先行研究

中心文について様々な研究が成されている。市川(1978)は、中心文について以下のように述べている。

中心文とは、段落における中心的な内容(小主題)を端的に述べている文のことである。トピック・センテンスとも呼ばれる。中心文は、どの段落にもあるとは限らないが、その反面、一つの段落に、二つ(以上)の中心文の含まれることもある。(p. 127)

市川は、段落を単位とした中に中心文を認め、中心文については文数に規定を設けてはいない。そして、中心文のタイプについて2つの文を挙げている。

中心文のタイプ ①[要約的中心文]—〈話題提示〉の機能

## ②[結論的中心文]ー<結論主張>の機能

また、樺島(1983)は、中心文に相当の文を「キーセンテンス」として考えている。

[前略]ここでキーセンテンスというのは、その項目あるいは、次の項目がどんな意図で書かれるか、要旨は何か示す(あるいは暗示する)文で、しかもそれを表すカタチをそなえた文である。(p. 153)

①内容をまとめて述べる文、②問題提起と結論を示す文、③筆者の意見を表明したり、他に対する要望を表したりする文、④定義・命令を行う文、⑤例示の「例えば」「例を示す」などの表現の直前に、何についての例示かを示す重要な文

ここで述べられている「キーセンテンス」は、市川の場合と異なり、書き手側からみた場合を想定しているものと言えよう。市川同様、読み手の側から中心文をとらえた佐久間(1993)は、中心文について次のように述べ、中心文の機能を4種16機能挙げている。

[前略]<段>や<連段>の中心的な内容を表し、他の文をまとめる働きをする文を、<中心文>や<トピック・センテンス(Topic Sentence)>と呼ぶ。一文章中には、それぞれの<段>のまとまりの大きさに応じたまとめる力、つまり、<統括力>を持つ種々の役割の<中心文>が含まれている。(p. 104)

- ①話題文<話題提示><課題導入><情報出典><場面設定><意図提示>
- ②結論文<結論表明><問題提起><提案要望><意見主張><解答説明>
- ③概要文<概略要約><主題引用>
- ④その他<前提設定><補足追加><承前起後><展開予告>

また、佐久間(1995)は市川とは異なり、段落における中心文をとらえるわけではなく、新たに<段>という単位を設け、中心文は<段>の中に1つ以上含むという定義をしている。

[前略]文章の直接的な成分である「段」は、一段内部の文集合の核となる「中心文」が有する統括機能の及ぶ範囲(統括領域)の言語表現であると考えられるが、「段」は、主として内容上のまとまりとして他

と相対的に区分される意味的な統一体である。「段」は原則として一個以上の中心文と、それによって統括される複数の文群からなる。(p. 94) また、中心文と似たものとして、立川(1997)は、新たに「中核文」というものを認定している。

[前略]中核文とは、文段を統括する意味内容を持つ一文であり、文章の意味的指標ないし形態的指標から読み手が客観的に認定していく文である。

「中心文」「キーセンテンス」「中核文」いずれも文章において重要な意味を持つ文として、統括力があると述べられ、機能的な指摘もされ、機能による形態的特徴を述べている。

これら先行研究を踏まえ、どのような文末述部が中心文に多く表れるのか傾向をみていくことにする。

### 3. 分析資料・方法

「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」各一カ月(1995. 4. 1~1995. 4. 30)分の社説を用いて分析する。(150文章----頭括式30文章・中括式15文章・尾括式88文章・両括式9文章・分括式8文章)<sup>(註2)</sup>文章構造類型による違いを考察するためには、6種の文章構造類型をそれぞれ考察しなければならないが、今回まず尾括式文章88文章(朝日26文章、毎日37文章、読売25文章)に限定して分析を試みる。

中心文は、佐久間(1993)の中心文の機能により認定する。本研究では「形式段落」を単位とし、一段落内に中心文を1つ(中心文のない場合をみとめる)認定する。1文章中の中心文の文末述部の傾向を見ていく。さらに、文章構造類型(今回は尾括式文章)による中心文の文末述部の形態的な特徴をみようとするものなので、文章を「はじめ」「なか」「おわり」の3つのまとまりに分ける。そして、「はじめ」「なか」「おわり」のまとまりの中で、中心文の文末述部の形態の出現傾向を考察する。尾括式文章は、「おわり」の部分が文章全体をまとめるので、中心文の文末形態も「おわり」の部分に特質が見られるのではないかという点を仮定して分析する。

また文末述部の形態の分類として、永野(1986)は、文章研究の観点から文末述部を「客体的表現」「主体的表現」「伝達的表現」と3区分でとらえた「辞に関する分類語彙例表」をまとめている。また、伊藤(1996)は、永野を踏まえ「文末述部の表現の分類と語例」をまとめている。本稿では、動詞・形容詞の種類により「感情・思考動詞」「性状規定表現」として分類しなおしているため、語彙による重要性を加味した伊藤の分類を用いた。

- A. 客体的表現(動詞, 形容詞の終止形/過去, 完了/動詞の打ち消し表現  
/接尾語<状態・推移>/体言止め)
- B. 主体的表現
  - B 1. 客観的判断(伝聞/様態/回想, 経験, 習慣/難易の形容詞/願望  
<3人称>/接尾語<尊敬, 使役等>/存在動詞)
  - B 2. 主観的判断(推定/適当/程度/許容, 認可/確認/可能/断定)
  - B 3. 主体的判断(限定/推量/義務, 当然/性状規定表現/当為/措定)
  - B 4. 表出(意志/希望, 願望<1人称>/感動, 詠嘆, 驚異/感情, 思考動詞)
- C. 伝達的表現(疑問, 問いかけ/反問/勧誘/警告/依頼, 要求/命令, 禁止)

社説の文章を取り上げて具体的に分類してみる。(ローマ数字は段落番号、算用数字は文番号を示す。)

(例1)

- I ①急激な円高を背景に生産拠点を海外に移す動きが加速している。  
②放置しておけば産業の空洞化は必至であり、その対策として新たな地帯を切り開く「経済フロンティア拡大」が叫ばれている。
- II ③政府は(1)店頭市場を改革しベンチャービジネスを育成する(2)規制緩和五カ年計画を三年に短縮する(3)情報化関連など新公共投資を拡充する——など、さまざまな政策を打ち出している。  
④いずれも着実に推進する必要があるが、その一つとして産業と大学とのネットワーク強化に注目したい。

(毎日新聞1995年4月30日「新しい産学協調の構築を」)

(例1)は文章の「はじめ」の部分である。Ⅰ段落では②文が<話題提示>の機能の文で、文末の形態は「A1. 客体的表現」の接尾語(状態・推移)「～ている」に分類される。また、Ⅱ段落では④文が<意図提示>の機能の文でこれから述べることについて個人的希望を表明し「B4. 表出」の希望「たい」に分類される。

(例2)

XⅦ ③① 全国の医療機関が国立がんセンター方式にならえば、不必要で危険な新薬試験はしにくくなり、悲劇は激減するだろう。

XⅧ ③② 日本医学会総会はメインテーマに「人間性」を選んだ。

③③ 専門家と市民代表が話し合う「市民の医療トーク」を六日連続で開くなど、意欲的なプログラムも組まれている。

③④ この総会をきっかけに、患者と医療専門家が、対等の立場で医療をつくり上げる時代が始まることを期待する。

(朝日新聞1995年4月7日「患者とともにつくる医療を」)

(例2)は文章の「おわり」の部分である。XⅦ段落では ③① 文が筆者の見解であり<意見主張>の機能を示す文となり、文末述部は「B2. 主観的判断」の推定「～だろう」に分類される。またXⅧ段落では ③④ 文が筆者の見解で<提案要望>の機能を示す文であり、文末述部は「感情・思考動詞」(例：困る、好きだ、思う、考える、望む)に分類される。(「依頼・要求」は「～てほしい、～てもらいたい」を分類する)

#### 4. 中心文の文末述部の形態

##### 4.1 本文と中心文の文末形態

機能に基づき中心文を認定し、その文末述部を分類したものが【表】である。尾括弧式文章の総文数は2492文であった。その中で「A. 客体的表現」は1088文(43.7%)、「B. 主体的表現」は1263文(50.7%)、「C. 伝達的表現」は141文(5.7%)であるのに対し、中心文の合計は「A. 客体的表現」が189文(23.1%)、「B. 主体的表現」534文(65.3%)、「C. 伝達的表現」が95文(11.6%)となっている。本文に比べ、中心文は「A. 客体的表現」20.6%減であるのに対し、

【表】中心文の文末形態の分類

文末形態	本文・中心文 本文(%)	中心文			
		はじめ(%)	なか(%)	おわり(%)	計(%)
A. 客体的表現	1088(43.7)	98(43.2)	69(22.3)	22(7.8)	189(23.1)
動詞, 形容詞の終止形	222(8.9)	22(9.7)	17(5.5)	6(2.1)	45(5.5)
過去, 完了	421(16.9)	41(18.1)	27(8.7)	5(1.8)	73(8.9)
動詞の打ち消し表現	69(2.8)	3(1.3)	7(2.3)	3(1.1)	13(1.9)
接尾語(状態・推移)	347(13.9)	32(14.1)	18(5.8)	8(2.8)	58(7.1)
体言止め	29(1.2)				
B. 主体的表現	1263(50.7)	104(45.8)	215(69.6)	215(76.2)	534(65.3)
B1. 客観的判断	336(13.5)	14(6.2)	33(10.7)	15(5.3)	62(7.5)
伝聞	53(2.1)				
様態	2(0.08)			1(0.4)	1(0.1)
回想, 経験, 習慣	40(1.6)	1(0.4)	5(1.6)		6(0.7)
難易の形容詞	22(0.9)		6(1.9)		6(0.7)
願望(3人称)					
接尾語(尊敬, 使役等)	54(2.2)	4(1.8)	3(1.0)	2(0.7)	9(1.1)
存在表現	165(6.6)	9(4.0)	19(6.1)	12(4.3)	40(4.9)
B2. 主観的判断	561(22.5)	45(19.8)	107(34.6)	69(24.5)	221(27.0)
推定	148(5.9)	10(4.4)	28(9.1)	23(8.2)	61(7.5)
適当	6(0.2)		2(0.6)		2(0.2)
程度	19(0.8)	2(0.9)	5(1.6)	2(0.7)	9(1.1)
許容, 認可	15(0.6)		3(1.0)	3(1.1)	6(0.7)
確認					
可能	72(2.9)	6(2.6)	14(4.5)	2(0.7)	22(2.7)
断定	301(12.1)	27(11.9)	55(17.8)	39(13.8)	121(14.8)
B3. 主体的判断	183(7.3)	25(6.6)	39(12.6)	59(20.9)	113(13.8)
限定	1(0.04)				
推量	11(0.4)	1(0.4)	3(1.0)	6(2.1)	0(1.2)
義務, 当然	62(2.5)	6(2.6)	9(2.9)	16(5.7)	31(3.8)
性状規定表現	26(1.0)	2(0.9)	3(1.0)	11(3.9)	16(2.0)
当為	39(1.6)	2(0.9)	10(3.2)	20(7.1)	32(3.9)
措定	44(1.8)	4(1.8)	14(4.5)	6(2.1)	24(2.9)
B4. 表出	183(7.3)	30(13.2)	36(11.7)	72(25.5)	138(16.9)
意志	11(0.4)	1(0.4)	3(1.0)	6(2.1)	10(1.2)
希望, 願望(1人称)	63(2.5)	14(6.2)	8(2.6)	33(11.7)	55(6.7)
感動, 詠嘆, 驚異	50(2.0)	6(2.6)	11(3.6)	12(4.3)	29(3.5)
感情・思考表現	59(2.4)	9(4.0)	14(4.5)	21(7.4)	44(5.4)
C. 伝達の表現	141(5.7)	25(11.0)	25(8.1)	45(16.0)	95(11.6)
疑問, 問いかけ	45(1.8)	11(4.8)	11(3.6)	5(1.8)	27(3.3)
反問	41(1.6)	9(4.0)	4(1.3)	12(4.3)	25(3.1)
勧誘	14(0.6)		2(0.6)	9(3.2)	11(1.3)
警告					
依頼, 要求	32(1.3)	4(1.8)	6(1.9)	18(6.4)	28(3.4)
命令, 禁止	9(0.4)	1(0.4)	2(0.6)	1(0.4)	4(0.5)
計(%)	2492(100)	227(100)	309(100)	282(100)	818(100)

「B. 主体的表現」「C. 伝達的表現」がそれぞれ、14.6%増、5.3%増となっている。さらに「B. 主体的表現」「C. 伝達的表現」の中でも「B3. 主体的判断」「B4. 表出」「C. 伝達的表現」では、本文が507文(20.3%)であるのに対し、中心文は34.6文(42.3%)となっており、22%増となって、本文と中心文の形態の差はより一層明らかになっている。逆に「B. 主体的表現」の中でも「B1. 客観的判断」は、本文では336文(13.5%)で、中心文は62文(7.5%)である。これは「B. 主体的表現」に分類されるが「B1. 客観的判断」は「客体的」要素が強く残っているものだと考えられる。

表現別に見ると、本文では<過去、完了>が最も多く421文(16.9%)、次いで<接尾語(状態・推移)>の347文(13.9%)、<断定>の301文(12.1%)が多くなっている。これらは事実を描写したり、報告したり、説明したりする文末述部に用いられるもので、「A. 客体的表現」や「B1. 主観的判断」に分類されるものである。一方、中心文の文末述部は<断定>121文(14.8%)が多いが、「B3. 主体的判断」「B4. 表出」「C. 伝達的表現」全てが本文全体に出現する割合より増加していて、突出して多いという表現は見られない。これは、中心文は「B. 主体的表現」「C. 伝達的表現」をするが特定の表現としては表れないと言える。

これらの結果から、本文の文末述部は、「A. 客体的表現」「B1. 客観的判断」を多く使い、個々の表現も特徴があるのに対し、中心文の文末述部は、個々の表現として突出するものはないが、「B. 主体的表現」、とりわけ「B3. 主体的判断」「B4. 表出」や「C. 伝達的表現」が多く用いられていると言えよう。

#### 4.2 尾括式文章に見られる中心文の文末形態

文章全体を「はじめ」「なか」「おわり」と大きく3つのまとまりに分けた時、「おわり」の部分が文章全体を統括するものを尾括式文章と言う。それが中心文の形態的特質と関係があるのならば「おわり」の部分に中心文の傾向が強く表れるはずである。【表】より、「はじめ」「なか」「おわり」の部分それぞれの「A. 客体的表現」「B. 主体的表現」「C. 伝達的表現」を比べてみると次のとおりである。

	「はじめ」		「なか」		「おわり」
「A. 客体的表現」	98文(43.2%)	>	69文(22.3%)	>	22文(7.8%)
「B. 主体的表現」	104文(45.8%)	<	215文(69.6%)	<	215文(76.2%)
「B1. 客観的判断」	14文(6.2%)	<	33文(10.7%)	>	15文(5.3%)
「B2. 主観的判断」	45文(19.8%)	<	107文(34.6%)	>	69文(24.5%)
「B3. 主体的判断」	15文(6.6%)	<	39文(12.6%)	<	59文(20.9%)
「B4. 表出」	30文(13.2%)	>	36文(11.7%)	<	72文(25.5%)
「C. 伝達表現」	25文(11.0%)	>	25文(8.1%)	<	45文(16.0%)

「A. 客体的表現」の「はじめ」の部分は本文の割合(43.7%)に近い。そして、「はじめ」「なか」「おわり」と減少し、「おわり」の部分は「はじめ」の部分の5分の1になっている。逆に「B. 主体的表現」では「はじめ」「なか」「おわり」と増加している。

「B1. 客観的判断」「B2. 主観的判断」「B3. 主体的判断」「B4. 表出」を別々に見ると、「B1. 客観的判断」「B2. 主観的判断」では「なか」の部分の割合が大きい。これは「なか」の部分が文章全体において状況の説明や解説を主とした客観的判断や主観的判断の表現を用いるためである。そして、「B3. 主体的判断」「B4. 表出」「C. 伝達表現」では「おわり」の部分の割合が大きくなる。しかし、「B4. 表出」「C. 伝達表現」では「おわり」に次いで「はじめ」の部分の割合が大きい。これは(例1)で取り上げたように「はじめ」の部分でこれから述べる文章に対する<意図提示>をしたり、<問題提起>をする中心文があるためである。

「はじめ」「なか」「おわり」と3つのまとまりに分けた際、「はじめ」の部分に位置する中心文は「A. 客体的表現」が多く、「なか」の部分に位置する中心文は「B1. 客観的判断」「B2. 主観的表現」が多く、「おわり」の部分では「B3. 主体的判断」「B4. 表出」「C. 伝達表現」が増えるという結果を得た。

## 5. まとめ

本文と比べ、中心文は文末述部の形態に明らかに違いが見られた。本文は

「A. 客体的表現」「B1. 客観的判断」により50%以上を占める。一方、中心文は「B3. 主体的判断」「B4. 表出」「C. 伝達の表現」により40%以上を占めるという形態的特質が認められる。また、尾括式文章の場合、「おわり」の部分に位置する中心文の文末述部には形態的特質が顕著に認められた。尾括式文章の「はじめ」「なか」「おわり」に位置する中心文の特徴をまとめてみると次のとおりである。

- 「はじめ」…「A. 客体的表現」の中でも、「過去・完了」を示す「～た(だ)」用いて事実を報告したり、「接尾語(状態・推移)」を示す「～ている」を用いて現在の状況を述べて〈話題提示〉をしている。
- 「なか」……「B2. 主観的判断」の中でも「断定」の表現「～である(～だ)」、あるいは「推定」の表現「～らしい」を多く用いて、〈解説説明〉を行ったり、筆者の〈意見主張〉をしたりしている。
- 「おわり」…〈意見主張〉あるいは〈提案要望〉を述べて文章全体をまとめるために「B3. 主体的判断」では「推量」の表現「～だろう」、「義務・当然」の表現「～しなければならない」、「当為」の表現「～べきだ」、「措定」の表現「～のである(のだ)」などがある。「B4. 表出」では「希望・願望」の表現「～たい」、「感情・思考表現」の「好きだ・思う・困る・望む」などがある。「C. 伝達の表現」では「疑問・問いかけ」または「反問」の表現「～か」、「依頼・要求」の表現として「～してほしい・～してもらいたい」

以上のようにまとめることはできるが「おわり」の部分では〈意見主張〉〈提案要望〉の機能を表す場合、「B3. 主体的判断」「B4. 表出」「C. 伝達の表現」のいずれかを用いることが多いが、特定表現によっているわけではない。

本稿では尾括式文章に限定し、これらの結果を得てきたが、頭括式文章の場合は「はじめ」の部分に、また中括式文章の場合は「なか」の部分に位置する中心文の形態的特質として「B3. 主体的判断」「B4. 表出」「C. 伝達の表現」が多く見られる可能性が考えられる。それらの分析を今後の課題としたい。

(注1) 文章構造の研究では様々な研究がなされている。永野(1986)は文の連鎖による統括関係、市川(1978)は「文段」、佐久間(1986)は「段」を認定し相互の統括関係を分

析するなどがある。

(注2)文章構造類型は主題を含む位置により、冒頭部に位置する〈頭括式〉、結尾部に位置する〈尾括式〉、展開部に位置する〈中括式〉、冒頭部と結尾部に位置する〈両括式〉、分散して位置する〈分括式〉、文章表面上に主題を持たない〈潜括式〉の6つに分けられる。本稿で扱う社説の構造類型の分類は拙稿(1998)において分類したものに從った。

### 参考文献

- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 伊藤誓子(1996)「論説文の文末述部における『段』統括機能」『国文目白』35
- 樺島忠夫(1983)「文章構造」『朝倉日本語講座5 運用I』朝倉書店
- 後藤利枝(1998)「論説文の文章構造と見出しの反復」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』5
- 佐久間まゆみ(1986)「文章構造論と構想——連文から文段へ」『文章論と国語教育』永野賢編 朝倉書店
- (1993)「日本語の文章構造」『日本語の理解と表現』放送大学教育振興会
- (1995)「中心文の「段」統括機能」『日本女子大学紀要 文学部』41
- 立川和美(1997)「説明文のマクロ構造把握に関する研究」(東京大学大学院総合文化研究科博士論文 未刊行)
- 永野 賢(1986)『文章論総説』朝倉書店